科目区分：聴覚言語障害コース、授業科目：総合演習

小グループで自主的に学ぶ総合演習での授業

特別支援教育講座　高橋信雄

１，はじめに

総合演習は、自ら主体的に学ぶことを前提する生きる力を種々の自然現象や社会現象を見つめることで学んでいくことを目標としていると考え、学生が自ら問題の設定をし、園問題意識を深め、疑問点を解決してプロセスであると考え、今期の授業を取り組んだ。また、これらの過程を通して、全人類が培ってきた種々の人権、人間観、世界観を見つめ、自らの生き方を再考していく一助とすることを目的とした。

そこで､以下のようにして授業を計画した。

１ 回 目：総合学習の意義と意味
２～４回：自分たちの身の回りのわからないことの例をあげながら問題意識の投げかけと問題解決のための情報収集の仕方を事例で提示
５～７回：テーマの整理と絞り込み
８～１３回：必要情報の収集
（10 と 13 回目は、途中経過発表）
１５回目：最終発表会
月に１回：経過報告（他の人の意見を聞く）

なお、最近の学生の動向を踏まえ、グループ学習を基本として、仲間と論議して進めていくことを重視した。情報の収集に際しては、単にインターネットで調べるだけでなく、実地に見聞し、そこで得た情報を生かす形で整理するよう指導した。

学生達が最終的に選んだテーマは、次の４つであった。

１，究極のたこ焼きを求めて（４名）
－おいしさの秘訣の黄金比の水量－

たこ焼きの歴史からはじまり、大学近辺のたこ焼きやさんのたこ焼きの違いを、調理時間、加える具材、大きさ、おいしさ、値段等の面から評価し、主観的なうまさを明らかにした。その上で、最もうまいと感じるたこ焼きを作るには、生地に加える水の量をどのくらいにすると良いのかを実習を重ねながら明らかにした。前半は、足と舌でたこ焼きの実態を明らかに、その上で究極のうまさのたこ焼き作りに実験的に挑戦し、その成果を報告したものである。報告の最後の締めとして、全員を巻き込んで実習が用意されていた。

２，テーマパークの生き残りをかけて
「ジブリの森」ワールドへの誘い（３名）

世の中には、数多くのテーマパークがあるが、経営がうまくいっているテーマパークは極めて少ないのが実情である。そこで、まず、テーマパークが成功するための条件を入場者数、場所、アトラクションの数、リピータ数などを調べ、リピータの確保がかぎになることを明らかにした。またそのためには、アトラクションの安全管理が欠かせないことから、安全管理の問題点を検討した。多く生じる自己を減らし､安全性を強調するためには、安全管理コーディネータが必要であること、そして安全管理コーディネータの果たす役割などを組織図を、特別支援教育コーディネータを例に提案した。最後に、こうした要件を備えた「ジブリの森」ワールドの提案がなされた夢のあるプレゼンテーションであった。３人のそれぞれの担当箇所を上手に統合した発表であった。

３，多様なポテトチップスの製造（２名）
－種類の豊富さと地域限定商品のうまさ－

アメリカで開発されたポテトチップスの由来（逸話）と種類や地域限定販売品等を含めるとどの位の種類が発愛されているのかを調べ、年間 3000 種近くが発売され、その時代にあった商品が次々に開発され、消えていく実態が報告された。あわせて、どんな組み合わせが可能で、おいしさはどうかの実験も行った。様々なトッピングやまぶしで、種々のポテトチップスが可能であることが報告され、最後に参加者全員で実演してみた。NHK の試してガッテンの学生バージョンの用であったが、調査や実習には生活に基礎おく学生の性格の一面が示されたようであった。

４，学内の落書きの実態（２人）

大学の教室の机には、ほとんどの場合落書きがたえないであろう。そうした落書きの理由や内容や教室内の机の位置や学部での違いを教室を数週間毎に回って実地調査をした。それらの調査結果をもとに作成したアンケート用紙を、１７０名以上の学生に実施した。

あわせて、アンケート用紙の裏に印刷されている歴史上の有名人物の絵に落書きをしてもらった。まず、机の位置は、専門のゼミ室以外は、後半部に多く認められていた。落書きの内容は、絵（キャラクタや自作絵、中にはデザイン賞ものもあった）と文章（歌詞や詩）が多く、工学部では数式などが目立った。落書きをする理由は、様々であったが、暇をもてあましていて書くというのが最も多かった。中には自己存在感を示すためというのあった。さらに、印刷した歴史上の人物絵に落書きをしてもらったところ、もとの絵とは関係なくその一部を利用した全く別の絵に仕上げているものが多かった。例えば、ザビエルの指の爪を長くして、悪魔に仕立てるとかである。）学生の思考のユニークさの一端をうかがえるものであった。

このような授業であったが、問題の取り上げ方､問題へのアプローチだけにとどまらず、問題解決のための提案にまで踏み込めた発表があったことは予想外であった。発表内容・プレゼン等は、今までの学習の成果か相手にわかり易く、機器のみでなくパフォーマンスや実習を含めていて、従来にない発展性を示していた。

しかし､学生への授業評価アンケートでは、１,「この授業の位置づけ（小中学校の総合的な学習の大学生版）」については、「知っていると答えた学生が１１名中２名、多分知っているのが７名､知らない２名」であった。その内容をきいいたところ大半が卒論での研究法とむすびつけており、初期の教員側の授業のもつ意味が、説明不足で、その一部である問題の解決法が強調されてしまったようである。今後の授業に際しては、意義も十分に触れることが大切である。

２、「何がいちばんおもしろかったか」は、テーマを絞る過程（１名）、調べる過程（１０名）で、いろいろな見方や意見や知らなかったことが自分達で調べてわかるからという理由が多かった、このように自分で調べて解ることの楽しさが興味の持続に繋がったものと考えられ、授業目標の一部は十分に達成できたと考える。

３,「テーマを自分たちで決めて取り組む」ことは、いろいろな人の意見やアイデアがきけて自分たちの興味のあることを独自で決められたのでよかったし、意欲的になれたとの意見が目立った。

４,「グループでの取り組みについて」は、全員が賛成で、２人（１）、２～３人（３）、３人（３）、３～４人（３）、４人（１）となり、２～４人での取り組みが良いようであった。特にこちらから指定することなく、随時まとまってテーマを絞る過程で変わることや一緒になるなど、興味を失うことの無いような範囲で、流動的に設定することが大切なようであるが、学生達は自らが自主的にできる力を十分に備えているといえよう。

５,「この授業を通して学んだこと」は、

・研究の仕方：調査法の検討の仕方、テーマの広がりやつながり、研究の進め方、自分達で計画を立てて調べまとめる、

・取り組みの姿勢：自ら選び行動することで得られる成果と改善点、段取りや実行力、実際に行くことは大切、

・相手との関係調整力：チームワーク、みんなで協力すること、意見が合わない時どうしたらいいかということ、お互いのいいところを学んで助け合うこと、

・プレゼン力：プレゼンの仕方、どうすれば見る側にとって聞きたいとおもえるか等

・達成感：新しい知識を得られる、

の５点にまとめられる。

６,「今後もこうした授業があった方がよい」かは、全員があった方がよいとの回答で、授業を楽しめ種々の経験を深められ、卒論への橋渡しになったり、積極的に取り組めたとのことであった。

７,「調査や検討にかけた時間は十分か」は、十分（３）少し（８）となり、時間が十分でなったことが伺える。これは授業時間で設定されているものの、他の就職活動など全学的な行事のために時間がさかれてしまうので、授業時間の設定について今後検討する筆お湯がある。

今回の授業は、グループ学習で一から自分たちで行っていくいくことが前提であり、日常の受け身の授業とは違って、学生には大変良い刺激となったと思われる。担当者が心がけたことが、学生の意見を全面的に受け入れ多様な視点の一部を披露する程度だった。また、学生が自ら学ぶという前提を堅持した。しかし、学生に対して、授業の意義と目標をさらに明確にして取り組み必要があろう。